日蓮大聖人御書全集

うらぼんごしょ

盂蘭盆御書

新版
2022
～
2027

盂蘭盆御書

弘安元年('78)または同2年('79)の7月13日
57歳または58歳　治部房の祖母
御返事　じぶどののうばごぜんのかえり事　日蓮

盂蘭盆と申し候ことは、仏の御弟子の中に、目連尊者と申して、舎利弗にならびて智慧第一・神通第一と申して、須弥山に日月のならび、大王に左右の臣のごとくにおわせし人なり。この人の父をば吉占師子と申し、母をば青提女

と申す。その母の慳貪の科によって餓鬼道に堕ちて候いしを、目連尊者のすくい給うより事おこりて候。

その因縁は、母は餓鬼道に堕ちてなげき候いけれども、目連は凡夫なれば知ることなし。幼少にして外道の家に入り、四い陀・十八大経と申す外道の一切経をならいつくせども、いまだその母の生処をしらず。その後、十三の年とし、舎利弗とともに釈迦仏にまいりて御弟子となり、見惑をだんじて初果の聖人となり、修惑を断じて阿羅漢となりて、三明をそなえ六通をえ給えり。天眼をひらいて三千

大千世界を明鏡のかげのごとく御らんありしかば、大地をみとおし三悪道を見ること、氷の下に候魚を朝日にむかいて我らがとおしみるがごとし。その中に餓鬼道と申すところに我が母あり。のむことなし、食うことなし。皮はきんちょうをむしれるがごとく、骨はまろき石をならべたるがごとし。頭はまりのごとく、頸はいとのごとし。腹は大海のごとし。口をはり手を合わせて物をこえる形は、うえたるひるの人のかをかげるがごとし。先生の子をみてなかんとするすがた、うえたるかたち、たとえをとるに及ば

大千世界を明鏡のかげのごとく御らんありしかば、大地
見通　影　ご覧
をみとおし三悪道を見ること、氷の下に候魚を朝日にむ
通　見　氷　下　候　魚　朝　日　向
かいて我らがとおしみるがごとし。その中に餓鬼道と申す
透　見　中　餓　鬼　道　申
ところに我が母あり。のむことなし、食うことなし。皮は
所　飲　食　皮
きんちょうをむしれるがごとく、骨はまろき石をならべた
金　鳥　毟　骨　丸　石　並
るがごとし。頭はまりのごとく、頸はいとのごとし。腹は
毬　頸　糸　腹
大海のごとし。口をはり手を合わせて物をこえる形は、う
海　口　張　手　合　物　乞　形　飢
えたるひるの人のかをかげるがごとし。先生の子をみてな
蛭　人　香　嗅　先　生　子　見　泣
かんとするすがた、うえたるかたち、たとえをとるに及ば
姿　飢　形　譬　及

ず。いかんがかなしかりけん。

法勝寺の執行・俊寛が、いおうの島にながされて、はだかにて、かみくびつきにうちおい、やせおとろえて海へんにやすらいて、もくずをとりてこしにまき、魚を一つみつけて右の手にとり、口にかみける時、本つかいしわらわのたずねゆきて見し時と、目連尊者が母を見しと、いずれかおろかなるべき。かれはいますこしかなしさはまさりけん。

目連尊者は、あまりのかなしさに大神通をげんじ給い、はんをまいらせたりしかば、母よろこびて右の手にははん

をにぎり、左の手にてははんをかくして口におし入れ給いしかば、いかんがしたりけん、はん変じて火となり、やがてもえあがり、とうしびをあつめて火をつけたるがごとく、ぱともえあがり、母の身のここごことやけ候いしを目連見給いて、あまりあわてさわぎ、大神通を現じて大いなる水をかけ候いしかば、その水たきぎとなりて、いよいよ母の身のやけ候いしことこそ、あわれには候いしか。

その時、目連、みずからの神通かなわざりしかば、はしりかえり、須臾に仏にまいりてなげき申せしようは、「我が身

握 ひだり て 飯 隠 くち 押 い たま
燃 上 飯 へん ひ
燃 上 灯 心 集 ひ 付
はは み 焼 そうら もくれん み
たま 慌 騒 だいじんずう げん みず
掛 そうら みず 薪
焼 そうら 哀 そうら
ときもくれん 自 じんずう 叶 走
帰 しゅゆ ほとけ 参 歎 もう 様 わ み

は外道の家に生まれて候いしが、仏の御弟子になりて阿羅漢の身をえて、三界の生をはなれ、三明六通の羅漢ははなりて候えども、乳母の大苦をすくわんとし候に、かえりて大苦にあわせて候は心うし」となげき候いしかば、仏説いて云わく「汝が母はつみふかし。汝一人が力及ぶべからず。また多人なりとも、天神・地神・邪魔・外道・道士・四天王・帝釈・梵王の力も及ぶべからず。七月十五日に十方の聖僧をあつめて、百味おんじきととのえて、母のくはすくうべし」と云々。目連、仏の仰せのごとく行い

げどう いえ う そうら ほとけ みでし
あらかん み 得 さんがい しょう 離 さんみょうろくつう らかん
そうら はは だいく 救 そうろう
だいく 遭 そうろう こころ 憂 歎 そうら
ほとけと のたま なんじ はは 罪 深 なんじいちにん ちから
およ たにん てんじん ちじん じゃま げどう
どうし してんのう たいしゃく ぼんのう ちから およ しちがつじゅうごにち
じっぽう しょうそう 集 ひゃくみ 飲 食 調 はは
苦 救 もくれん ほとけ おお おこな
うんぬん

しかば、その母は餓鬼道一劫の苦を脱れ給いきと、盂蘭盆経と申す経にとかれて候。それによって、滅後末代の人々は七月十五日にこの法を行い候なり。これは常のごとし。

日蓮案じて云わく、目連尊者と申せし人は、十界の中に声聞道の人、二百五十戒をかたく持つこと石のごとし。三千の威儀を備えてかけざることは十五夜の月のごとし。智慧は日ににたり、神通は須弥山を十四そうまき、大山をうごかせし人ぞかし。かかる聖人だにも重報の乳母の恩ほうじがたし。あまつさえ、ほうぜんとせしかば、大苦をま

し給いき。いまの僧等の、二百五十戒は名ばかりにて、事をかいによせて人をたぼらかし、一分の神通もなし。大石の天にのぼらんとせんがごとし。智慧は牛にるいし羊にことならず。たとい千万人をあつめたりとも、父母の一苦すくうべしや。

せんずるところは、目連尊者が乳母の苦をすくわざりしことは、小乗の法を信じて二百五十戒と申す持斎にてありしゆえぞかし。されば、浄名経と申す経には、浄名居士と申す男、目連房をせめて云わく「汝を供養せば、三

悪道に堕つ」云々。文の心は、二百五十戒のとうとき目連尊者をくようせん人は、三悪道に堕つべしと云々。これまた、ただ目連一人がきくみみにはあらず。一切の声聞、乃至、末代の持斎等がきくみみなり。この浄名経と申すは、法華経の御ためには数十番の末の郎従にて候。

詮ずるところは、目連尊者が自身のいまだ仏にならざるゆえぞかし。自身仏にならずしては、父母をだにもすくいがたし。いおうや他人をや。

しかるに、目連尊者と申す人は、法華経と申す経にて、

「正直に方便を捨つ」とて、小乗の二百五十戒立ちどころになげすてて南無妙法蓮華経と申せしかば、やがて仏になりて、名号をば多摩羅跋栴檀香仏と申す。この時こそ、父母も仏になり給え。故に、法華経に云わく「我が願いは既に満じて、衆の望みもまた足りなん」云々。**目連が色心は父母の遺体なり。目連が色心仏になりしかば、父母の身もまた仏になりぬ。**

例せば、日本国八十一代の安徳天皇と申せし王の御宇に、平氏の大将・安芸守清盛と申せし人おわしき。度々の合戦

に国敵(こくてき)をほろぼ滅(めつ)して、上太政大臣(かみだいじょうだいじん)まで臣位(しんい)をきわめ極(きわ)め、当今(とうぎん)はまご孫となり、一門(いちもん)は雲客月卿(うんかくげっけい)につらなり列(つら)なり、日本(にほん)六十六国(ろくじゅうろくこく)・島(しま)二(ふた)つを掌(たなごころ)の内(うち)にかいにぎ掻握(かいにぎ)りて候(そうら)いしが、人(ひと)を順(したが)うること大風(おおかぜ)の草木(そうもく)をなびかし靡(なびか)したるようにて候(そうら)いしほどに、心(こころ)おごり傲身(みあが)あがり上、結句(けっく)は神仏(しんぶつ)をあなずりて侮(あなど)り、神人(じにん)と諸僧(しょそう)を手(て)ににぎらんとせしほどに握(にぎ)、山僧(さんそう)と七寺(しちじ)との諸僧(しょそう)のかたきとなりて敵(かたき)、結句(けっく)は去(い)ぬる治承四年十二月二十二日(じしょうしねんじゅうにがつにじゅうににち)に、七寺(しちじ)の内(うち)、東大寺(とうだいじ)・興福寺(こうふくじ)の両寺(りょうじ)を焼(や)きはらい払(はら)いてありしかば、その大重罪(だいじゅうざい)、入道(にゅうどう)の身(み)にかかりて、かえるとし養和(返年(ようわ))

元年閏二月四日、身はすみのごとく血は火のごとく、すみのおこれるがようにて、結句は炎身より出でてあっちじに死ににき。その大重罪をば二男宗盛にゆずりしかば、西海に沈むとみえしかども東天に浮かび出でて、右大将頼朝の御前に縄をつけてひきすえて候いき。三男知盛は、海に入って魚の糞となりぬ。四男重衡は、その身に縄をつけて京・かまくらを引きかえし、結句なら七大寺にわたされて、十万人の大衆等、我らが仏のかたきなりとて一刀ずつきざみぬ。

悪の中の大悪は、我が身にその苦をうくるのみならず、子と孫と末七代までもかかり候いけるなり。善の中の大善もまたまたかくのごとし。

目連尊者が法華経を信じまいらせし大善は、我が身仏になるのみならず、父母、仏になり給う。上七代・下七代、上無量生・下無量生の父母等、存外に仏となり給う。乃至代々の子息・夫妻・所従・檀那・無量の衆生、三悪道をはなるるのみならず、皆、初住・妙覚の仏となりぬ。故に、法華経の第三に云わく「願わくはこの功徳をもって、あま

ねく一切に及ぼし、我らと衆生と、皆共に仏道を成ぜん」云々。

されば、これらをもって思うに、貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち給えり。この僧は無戒なり、無智なり。二百五十戒、一戒も持つことなし。三千の威儀、一つも持たず、智慧は牛馬にるいし、威儀は猿猴にに候えども、あおぐところは釈迦仏、信ずる法は法華経なり。例せば、蛇の珠をにぎり、竜の舎利を戴けるがごとし。藤は松にかかりて千尋をよじ、鶴は羽を持って万里をかける。これは自身の

力にはあらず。治部房もまたかくのごとし。我が身は藤のごとくなれども、法華経の松にかかりて妙覚の山にものぼりなん。一乗の羽をたのみて寂光の空をもかけりぬべし。この羽をもって、父母・祖父祖母、乃至七代の末までもとぶらうべき僧なり。あわれ、いみじき御たからはもたせ給いておわします女人かな。

彼の竜女は珠をささげて仏となり給う。この女人は孫を法華経の行者となしてみちびかれさせ給うべし。事々そうそうにて候えば、くわしくは申さず。またまた申すべ

く候。恐々謹言。（そうろう　きょうきょうきんげん）

七月十三日（しちがつじゅうさんにち）

日蓮（にちれん）　花押（かおう）

治部殿うばごぜん（じぶどのの祖母御前）御返事（ごへんじ）

麈牙一俵（こめひとたわら）・やいごめ（焼米）・うり（瓜）・なすび（茄子）等、仏前（ぶつぜん）にささげ捧て申し上げ（もうあ）候い了（そうら）わんぬ。（お）